

コロナ時代の地球人文学(Globalology)

趙晟桓 (円仏教思想研究院 責任研究員)

許南診 (円仏教思想研究院 研究教授)

I. はじめに： 円仏教の思想研究院の紹介

円光大学校円仏教思想研究院は、2016年に大学重点研究所に選ばれ、「近代韓国宗教の公共性」¹を主題として研究を進めてきた。その過程で研究された内容を要約すると、次の通りである。

東学によって提唱された「開闢」は、韓国の自生的近代化運動 (indigenous modernity movement) の思想的理念であり、これらは斥邪派や開化派とは異なる第3の道を選んだという点から「開闢派」として分類でき、これらの開闢宗教が追求した公共性は、人間と国家の境界を越えて地球的 (global) 次元の生命 (サリム) と平和、会通と共和を実現しようとしたという点で、「**地球的公共性**」 (global publicness) と命名できる。

これらの蓄積をもとに、今年から、次の段階の研究を並行している。それは<地球化時代の人文学> (Humanities in the age of Globalization) である。略して「地球人文学」 (Globalology) とも称す。人文学といっても、文・史・哲に限定せず、社会学・政治学・宗教学・人類学などの社会科学とも連結している。西洋では、1990年代から各分野で「グローバル (地球的)」という修飾語を付けた研究が興り始めたが、それを本格的に「地球人文学」という独立した学問分野と認識してはいない。

II. 地球化と地球学(Globalization and Global Studies)

1. 「地球学」とは何か? (What is Globalization?)

「地球学」の核心概念は、「地球化」 (globalization) だ。地球化は、「地球が一つにつながっていく」という意味だ。「地球化時代」 (global age) は、このような地球化が展開される時代を言う。コロナの別称である「パンデミック」 (pandemic) を思い浮かべればわかりやすい。

「地球化」という用語が広く使用され始めた時点は、1990年代である。世界中のどこでも目にするマクドナルド、スターバックス、また超国家的機構などは、地球化現象を示す代表的な事例である。現代人の生活は、時間が進むにつれ、相互関係が緊密になり、お互いの依存度が高まっているが、地球化はこのような変化を最もよく捉える概念として広く用いられている。「地球化とは何か?」については多様な解釈があるが、主に相互接続性のグローバル化、すなわち個人・集団・社会が一つの地球の中で、互いに緊密に相互作用す

¹ 正式名称は「近代文明受容過程に現れた韓国宗教の公共性」である。

る過程として定義される。

しかし地球化は、必ずしも連結性や単一性のみを強調するのではない。地球的 (global) と地域的 (local) が合わさった「地球地域的 (glocal)」という言葉があるよう (ローランド・ロバートソン)、地球化とともに地域化も同時に進行することがある。たとえばコロナの場合、伝播は地球的だが、防御は国家別に行われ、感染の危険のために、オフライン行事は小規模で行われている。

また、地球化が良いか悪いかをめぐる論争も進行中だ。地球化論争をいちいちすべて紹介することはできないが、明らかなのは地球化が両面性を持っているという点である。人権・平和のような肯定的な価値を地球的に拡散させもするが、経済的不平等・ヘイト・気候危機などは地球化の暗い裏側だからである。最近のコロナ 19 パンデミックは超連結社会がもたらした災害である。だからある人は「脱地球化」を提唱したり、別のある人は地球的連帯の必要性を主張するなど、地球化の論争はまだ熱い。

2. 韓国での「地球化」受容

地球化概念は、1990年代から西洋の学界で本格的に使用されはじめた。しかし、韓国には「世界化」という訳語でまず紹介された。しかし「世界化」は、地球化の経済的側面だけを指すにすぎない。つまり、新自由主義のような「経済的地球化」(economical globalization) を「世界化」と翻訳したのである。一方、「世界化」は「国際化」という意味でも用いられる。この場合、地球化は「地域的な (local) ものを世界中に広く知らせる」という意味である。たとえば、「韓流の世界化」は「韓国文化を全世界に広める」という意味である。

もう一方で、地球化は、経済だけでなく政治・文化・歴史・生態・疾病などのあらゆる領域を包括する概念である。だから今では、韓国の学界でも「世界化」よりは「地球化」という語を用いている。たとえば、私たちが現在経験しているコロナは「疾病の地球化」に属する。また、世界化が「国家」を単位とする概念だとすれば、地球化は国家という境界が解体した状況を言う。たとえば、超国家企業の登場がそうした例である。これらはまるでコロナのように国境や国籍の制約を受けず、自由に行き来している。

このような意味の「地球化」概念を韓国社会に本格的に知らせた張本人は、ウルリッヒ・ベックである。彼が1997年に書いた『What is Globalization?』(原著はドイツ語)は、韓国語で『地球化の道』(2000)として翻訳された。「世界化の道」ではなく、「地球化の道」である。ここには、当時の「世界化」言説にたいするウルリッヒ・ベックの批判が横たわっている。ウルリッヒ・ベックは「globalization」を経済的な世界化としてのみ理解することは、地球化の全体的な側面を見逃した誤りと指摘しつつ、globalization は情報・文化・生産・生態などの領域で、全方位的に進行していると述べた。特に「危機の地球化」にたいしては、すでに1986年に書かれた『危険社会 (Risk Society)』(ハングル翻訳は2006年)から強調している。また、『地球化の道』では「地球化」をはじめとして、地球性(globality)、

地球主義 (globalism)、「省察的近代性」(reflexive modernity) などのように、当時西欧の学界で議論の中心になっているのは概念を詳細に論じている²。

3. 各分野の地球化

ウルリッヒ・ベックの指摘のように、地球化は、過去 30 年余りの間、政治・経済・社会・文化・宗教など、ほぼすべての分野にわたって進行してきた。このような地球化の多様な側面を理解するために、各学問分野でも「地球化」を研究する傾向が増している。ヤン・ネーデルフェーン・ピーテルスは各分野別に地球化に関する研究主題を次のように分類している。

各学問分野の地球化

分科学問	行為者、領域	キーワード
経済学	多国籍企業、銀行、技術	グローバル企業、世界生産、 グローバル資本主義、新経済、dot.com
文化学	マスメディア、情報通信、 広告、消費	地球ビレッジ、CNN World、マクドナルド化、 ディズニー化、混種
政治学 国際関係学	国家の国際化、社会運動、 国際 NGO	諸国家の経済、ポスト国際政治学、 地球市民社会
社会学	近代性	資本主義、国民国家、産業化
哲学	地球的省察性 (global reflexivity)	地球倫理、普遍的道德性
政治境界学	資本主義	世界市場
歴史学 人類学	文化間の交易、技術、 世界宗教、進化	地球の流れ、地球のエクメネ (ecumene) 企業の大規模化
生態学	地球生態学、生態系の統合	宇宙船地球、地球的危機

*ヤン・ネーデルフェーン・ピーテルス『グローバリゼーションと文化』、조관연·손선애訳、エコリーブル、2017、30 頁

また、最近改訂版が出された Manfred B. Steger の『*Globalization : A Very Short Introduction*』(Oxford University Press、2020、第 5 版。初版は 2003 年)の目次は次の

² これについては趙晟桓、「パンデミック時代に読む地球学 (1) —ウルリッヒ・ベックの『地球化の道』を中心に」、『開闢新聞』93 号 (2020 年 5 月) を参照のこと。

とおりである。

1. What is globalization? (地球化とは何か?)
2. Globalization in history (歴史の中の地球化)
3. The economic dimension of globalization (地球化の経済的側面)
4. The political dimension of globalization (地球化の政治的側面)
5. The cultural dimension of globalization (地球化の文化的側面)
6. The ecological dimension of globalization (地球化の生態的側面)
7. Ideological confrontations over globalization (地球化をめぐる理念的対立)
8. The future of globalization (地球化の未来)

ここでは、地球化という一つの主題を、歴史・政治・経済・文化・生態の各分野にわたって扱っている。そしてそれを「地球化の文化的側面」、「地球化の政治的側面」といった方式で表現している。

4. 地球化 (Globalization) を扱う地球学 (Global Studies)

一方、各学問分科において地球化現象を扱う場合には、「global」という修飾語を付して表現している。代表的に、社会学の場合には「global sociology」、歴史学の場合には「global history」というのがそれだ。ここで「global sociology」は、韓国語で「地球社会学」と翻訳されているが³、「global history」は、日本や韓国では「地球史」と紹介されている（中国では全球史）。たとえば、以下のとおりである。

- ① Sebastian Conrad, *What Is Global History?*, 2017.
- ② 川上紳一・東條文治著、박인용訳、『一冊で十分な地球史：地球の6大事件から人類の誕生まで』、モミの森、2010（原題は『最新地球史がよくわかる本』）
- ③ オッド・アルネ・ウェスタッド、옥창준訳、『冷戦の地球史・米国、ソ連、第三世界』、エコリーブル、2020（原題は *The Global Cold War*）
- ④ 조지형・김용우ほか、『地球史の挑戦 — どうやってヨーロッパ中心主義を超えるか』、黄海文集、2010。

ここからわかるように、地球史は大きく二つの分野に分けることができる。一つはビッグヒストリーであり、もう一つは、各主題別に地球化の過程を研究する分野である（たとえば、「茶 (tea) の地球史」など）。ビッグヒストリーとしての地球史は、先史時代から今日に至るまで、地球が一つにつながっていく過程を巨視的に追跡している。代表的な地球

³ たとえば社会学の場合には、ロビン・コーエン、ポール・ケネディ著、박지선訳、『地球社会学』、人間愛、2012（原題は Global Sociology、初版は2000年）が代表的である。

史学者であるマズリッシュ（Bruce Mazlish）も、地球史を「地球化の過程にたいする歴史的省察」、また「地域や国家の層位ではなく、地球的層位における研究」と定義している（ただし前者が地球史の固有な領域であると見ている）。

このように、地球的次元から歴史に接近する「グローバルヒストリー」（地球史）を「地球歴史学」と呼ぶならば、「グローバル社会学」も「地球社会学」と呼べるだろう。同様に、「地球宗教学」、「地球政治学」といった命名も可能だろう。この文章で言う「地球学」（Global Studies）は、こうした諸学問を総称する概念である。あたかも朝鮮後期に「実学」という新しい学問の流れが生じたように、西欧の学界でも、1990年代から「地球学」と呼ぶにふさわしい新しい学問潮流が始まっているのだ。

しかし、朝鮮後期の思潮を指す「実学」概念も1930年代の朝鮮学運動の人々が付けた名前であるように、国内ではまだ「地球学」という名称が本格的に使用されていない。海外でも「グローバル」という修飾語はついているが、主に社会科学などの一部の分野でのみ使用されているだけである。それは地球学の学問的ルーツが、社会・政治・経済・文化の相互連結性を理解するところから出発したためである。

しかし、「地球学」という学問分野が別途にあって、上の表で紹介した地球化の諸現象を総合的に扱うこともある。2010年に出版された『*An Introduction to Global Studies*（地球学入門）』がそれである⁴。その目次は次のとおりである。

1. Going Global（地球的になる）
2. Nation-state System（国民国家体制）
3. International Organizations（国際機構）
4. Human Rights（人権）
5. The Natural Environment（自然環境）
6. Population and Consumption（人口と消費）
7. Infectious Disease and Globalization（感染症と地球化）
8. The Gendered World（ジェンダー化された世界）
9. Information and Communication Technologies（情報・通信技術）
10. War and Violent Conflict（戦争と暴力 紛争）
11. Peace（平和）

このように「地球学」は、最近に台頭している「地球的イシュー」（global issue）を研究対象とする幅広い学問分野を指しており、英語では「Global Studies」と表記されている。

5. 地球学研究の現況

⁴ 著者はキャンベル（Patricia J. Campbell）、マッキノン（Aran Mackinnon）、ステイブンス（Christy R. Stevens）。

1990年代にアジア、ヨーロッパ、アメリカの大学に「地球学科」が設立され、地球学関連の学会、研究所が登場するなど、急速に独立した学問の一分野として定着した。地球学科のカリキュラムは、「地球政治経済と発達」、「地球的文化とイデオロギー」、「地球的ガバナンス」、「地球的意识 (Global Consciousness)」、「移住と難民」などを扱う教育プログラムとして設定されている。米国イリノイ大の地球学センター長を務めていたエドワード・コロジエイ (Edward Kolodziej) は、地球学の研究と実践に適した地球的イシューとして、人権と生態的災害、ウイルス感染、大量破壊兵器の拡散などを指摘する⁵⁾。実際に、最近の地球学学会や研究所の主な関心は、コロナ19のようなパンデミックと結びついている。

国内でも地球学にたいする関心はとても高い。しかし、やや制限的である。国内のあちこちの大学で「Global Studies」を標榜しているが、大部分は国際および地域研究、国際通商などの既存の学際的なプログラムを、地球学プログラムに拡大再編し設計されているため地球学の学問的外縁はとても狭い。

※図（「西江大トランスナショナル人文学研究所」HP画面）省略

地球学関連の代表的な国内の研究所は、西江大トランスナショナル人文学研究所 (Critical Global Studies Institute) と梨花女子大地球史研究所 (Institute of World and Global History) である。西江大トランスナショナル人文科学研究所は、研究所の英文名 'Critical Global Studies Institute (CGSI) 」が示唆するように、地球学を志向する研究所である。地球的次元の問題に焦点を当てつつ、権力と資本が主導する「上からの地球化」を脱皮して、「下からの地球化」という展望から出発している。すなわち、人間の生活の違いや経験の多様性を「普遍」によって解消してしまう帝国の人文学と、「特殊」の名によって本質化する民族の人文学を拒否する。

※図（「梨花女子大地球学研究所」HP画面）省略

趙志衡 (조지형) 教授によって2008年に設立された「梨花女子大地球史研究所」は、西欧中心主義を脱皮できていない国内の世界史研究の傾向を批判的に照明しつつ、全地球的な眺望と観点にもとづく新たな世界史・地球史の研究と議論を活性化させ、新自由主義的経済の地球化、地球温暖化をはじめとする環境問題など、地球的次元の問題にたいする社会的論議と対応策を用意することを目的としている。

III. 地球人文学 (Globalology) の提案

⁵⁾ Patricia J. Campbell, Aran MacKinnon, Christy R. Stevens, *An Introduction to Global Studies*, Wiley-Blackwell, 2010, p.3.

1. 「世界史」から「地球史」に

西洋で地球史が台頭するようになった主な原因は、西欧中心主義・近代中心主義・人間中心主義などを克服するためである。ウルリッヒ・ベックは、20世紀に西欧で誕生した諸学問は「国家」の中心の「国家学」であったと批判する。「国史」や「国文学」のような国家単位の学問が成立したからだ。「世界史」(World history)はこうした諸「国史」の集合体である。ところで、当時の世界の中心はあくまで「ヨーロッパ」であった。その理由は、「近代化」の始まりがヨーロッパに設定されていたからである。したがって彼ら書いた世界史は、西洋で近代化が進行しそれが全世界に広がっていったという西欧近代史の地球的適用にすぎない。

一方、最近登場した「地球史」(global history)は、ヨーロッパ中心主義を克服する努力の一環である。これについて西洋の代表的な地球史家であるセバスティアン・コンラッド(Sebastian Conrad)は『*What is Global History?*』(Princeton University, 2016)で、次のように述べている。

「地球史」は、これまで歴史家たちが過去を分析するために使用してきた道具が、これ以上は十分でないという確信から誕生した。(…)特に近代の社会科学と人文学という二つの「生まれながらの欠陥」が、われわれにとって全世界的に進行している過程を体系的に理解するのに邪魔になっている。この欠陥の起源は、19世紀ヨーロッパにおける近代学問の形成にまで遡ることができる。

最初の欠陥は、社会科学と人文学の誕生が(国民)国家に縛られているという点である。(…)歴史は大部分の地域で国史に限定されていた。第二の欠陥は、近代の学問分野があまりにヨーロッパ中心であったという点である。(…)国家、革命、社会、進歩といった分析的概念は、具体的なヨーロッパの経験をどこでも適用することができるという(普遍的な)言語の理論に転換させた。(…)地球史は近代学問の二つの不幸な斑点(=生まれ的欠陥)を克服するための一つの試みである(pp.3-4)。

これによれば、近代の社会科学と人文学は19世紀にヨーロッパで誕生したが、それは「国民国家の誕生」といったヨーロッパの経験をもとにしている点で限界がある。最近台頭している地球史は国家中心・ヨーロッパ中心という2つの短所を克服するために試みられている新たな歴史叙述の方式である。

地球史の研究者たちが、「世界(world)」という語の代わりに「地球(globe)」という用語を好む理由もここにある。「世界」とは異なり、「地球」は西欧中心主義に汚染されておらず、国際的(international)や超国家的(trans-national)といった用語と同じく、「国家」を前提にしないからである⁶。

⁶ Dominic Sachsenmaie, *Global History, Global Debates, in: Connections. A Journal for Historians and Area Specialists*, 03.03. 2005.

韓国の代表的な地球史研究者である趙志衡も、地球史がヨーロッパ中心主義・中華主義・自民族中心主義・国家（一国）中心主義・人間中心主義から抜け出そうとする視角と方法論を提供すると言う。特に地球史は20世紀後半の地球化と直接的に関連しているので選好度が高いと言う⁷。

このように、一つの学問分野として浮上している地球史は、全地球的な包括性・相互連関性・普遍性・脱ヨーロッパ中心主義を核心的なアジェンダとして掲げながら、人類史全体にたいして客観的で脱中心的な接近を試みている。

このような問題意識のもと、2008年には地球的次元で地球史の研究者たちを結束させ、地球史を政治史・経済史・社会史・文化史などとともに、一つの歴史学の細部分野として確立するために「地球史・世界史学会ネットワーク（Network of Global and World History Organizations）」という研究団体が結成された。

2. 「地球」を対象とする地球人文学（Globalogy）

地球史のように、人間と国家中心の近代的人文学の限界を超えて地球的次元での人文学を模索しようという趣旨で、円仏教思想研究院で考案した概念が「地球人文学」である。現在議論されている社会科学分野を中心とした地球学は、依然として人間中心的という限界がある。そこで議論されている地球性（Globality）の概念には、人間を除く、非人間存在は排除されているからである。

実際にチャクラバルティは、地球化の話が本質的に人間中心的であると指摘しつつ⁸、地球システムが人間のためだけに作られたものでないことを悟るために、人間中心主義的（Homocentric, anthropocentrism）思考から生命中心的（Zoocentric, non-anthropocentrism）思考に転換しなければならないと主張する⁹。

「地球学者」（Geologist、または Earth Scholar）を自称したトマス・ベリー（Thomas Berry, 1914～2009）も地球を搾取の対象ではない、交わるべき主体として認識しなければならないと主張し、「生態代（Ecozoic Era）」という時代を提案した。ベリーは、従来の学問はすべて人間が地球を搾取するための手段として研究されたと批判し、地球の目的のために地球を研究する時が来たと言った¹⁰。

このようにトマス・ベリーは「地球にたいする新しい理解」をもとに、人間が地球志向的な生を営みながら地球共同体で他の存在と調和して生きていく方法を、自らの学問の領域としている。このような学問を、この文章では「地球人文学」と命名しようと思う。地

<www.connections.clio-online.net/debate/id/diskussionen-582>

⁷ 趙志衡、「地球史の未来と歴史の再概念化」、『歴史学報』2008年200号、204頁。

⁸ Dipesh Chakrabarty, “The Human Condition in the Anthropocene”, *The Tanner Lectures in Human Values*, Yale University, February 18–19, 2015, p.141.

⁹ Ibid, pp. 165-167.

¹⁰ トマス・ベリー著、이영숙訳、『トマス・ベリーの偉大な仕事』、対話文化アカデミー、2014。

球人文学は、人間以外の存在も「地球共同体」の構成員とみなして、人文学の対象とする。地球人文学は、地球にたいする新たな理解から出発し、人間中心ではない地球中心の地球化を学術的モットーとする。

実際に法学分野ではトマス・ベリーの提案にしたがって、人間以外の存在にも生存権を保証する「地球法」(Earth Jurisprudence)を制定しようという議論が活発である。韓国でも最近『地球のための法学：人間中心主義を超えて地球中心主義へ』(康錦実ほか、ソウル大学出版文化院、2020)が出版された。

また、人類学の分野でも従来の人間中心の人類学を越えて(beyond)、地球的次元の人類学が試みられている。エドゥアルド・コーン(Eduardo Kohn)の『森は考える(車恩姪 訳)がそれである。原題は「*How Forests Think : Toward an Anthropology Beyond the Human*」で2013年に出た。副題から分かるように、「人間中心の人類学を超える」人類学を試みている。この文章の主題に合わせれば、「地球人類学」(Global Anthropology)と命名できよう。

この本のタイトルは、1910年に出たリュシアン・レヴィ=ブリュール(Lévy-Bruhl)の「*How Natives Think*」(先住民はどう思うか?)を援用したものである(ハングル訳は김종우訳、『原始人の精神世界』)。レヴィ=ブリュールが「理性」という思惟能力をヨーロッパ人の特権だと考えたとすれば、エドゥアルド・コーンは人間以外の諸存在にも「思惟」能力を発見している点で、人間中心的な人類学を超え(beyond)ている。

このように、現代の学問は人間中心主義を克服し、地球共同体に向かっていくための多様な試みが行われている。地球人文学も地球を一つの共同体であると考え「地球サリム学」を志向するという点で、たんに「文史哲」のみに限定せず、地球法学や地球人類学、また地球民主主義、地球宗教学、地球平和学といった多様な学問領域に広げていきたい。

今日、人類が直面しているコロナ19という地球的危機は、人間が地球システム自体を攪乱させた結果だ。パンデミックを克服するためには、地球的転換(Global Transformation)が必要であり、地球的連帯、すなわち地球共治(Global Governance)が要請される。併せて、人間中心の「人間世」または「人類世」から、地球の中心あるいは生命中心の「地球世」への移行が要求される。地球人文学は、このような時代的要請に応えるための学問である。

3. 韓国哲学の中の地球人文学

地球人文学的な問題意識は、韓国の哲学の中にも発見できる。朝鮮初期の儒学者である退溪・李滉は、秋巒・鄭之雲とともに、中国の「太極図」から一歩進んだ「天命図」を製作した。「太極図」が太極から万物が生成分化する過程を図式的に描いた一種の「陰陽五行図」だとすれば、「天命図」は宇宙を一つの「円」として図像化し、その中に人間と万物を配置させている点で、トマス・ベリーの提唱した「地球共同体」の図像化と理解することができ、同時に円仏教の「一円相」を連想させる。

また、朝鮮後期の実学者として知られる洪大容は、『鑿山問答』で西洋の天文学的知識をもとに地球球形説と地球自転説などを主張しつつ、「世界の中心はない」という脱中華主義を宣言している。その後を引き継ぐ気学者である崔漢綺も『気学』(1857)や『地球典要』(1857)などにおいて、思惟の中心を中国から地球に転換する試みをしている。ここから分かる事実は、現代の西洋の地球学や地球人文学が西欧中心主義を克服するための学問的努力であったとすれば、朝鮮後期の実学や開闢学は中華中心主義を克服するための努力の産物だったという点である。

東学から始まり天道教、円仏教に至る近代韓国の開闢宗教においても、地球学で用いられる「地球的想像 (global imaginary)」や「地球的意識」(global consciousness)のような概念を見出すことができる。海月・崔時亨の「天地父母万物同胞」思想、少太山・朴重彬の「一円」「謝恩」、鼎山・宋奎の「ハンウル内」「三同倫理」、天道教と円仏教の四海一家や、世界一家などがそれである。これらは人間と万物が一つの共同体をなす世界を志向するという点で、トマス・ベリーの「地球共同体」(Global Community)概念と相通じている。

また、1994年に金大中アジア太平洋平和財団理事長は『Foreign Affairs』に寄稿した文「文化は宿命か？」(Is Culture Destiny?)において、東学や仏教のような「アジア的価値」に言及しながら「地球民主主義」(global democracy)概念を提唱した。彼が言う「地球民主主義」は、人間以外の存在にも生存権を保障する民主主義を意味するという点で、東学思想家の海月・崔時亨(1927~1898)の提示した「敬物」概念を連想させ、最近台頭している「生態民主主義」や¹¹「地球法」とも相通じている。

IV. おわりに―「地球人文学センター」(Center for Globalogy)の提案

現在、国内外で「地球学」にたいする関心が増大している状況で、「地球人文学」の名称の先取が必要である。「地球人文学センター」を通じて、多様な学術研究事業(人文社会研究所事業、HK+事業など)に十分に支援可能と判断される。特にコロナ19パンデミック状況から推察すると、「地球人文学」の学問的定立のための地球人文学センターの設立はきわめて急を要する状況である。

もしも「地球人文学センター」の設立が可能であれば、現在推進している翻訳書や叢書など地球人文学関連の研究成果を「地球人文学センター」の名前で発信し、今後の学術研究事業支援のための基盤を築くことができる。具体的には、2021年3月に予定している円仏教思想研究院主催の「地球化時代の人文学」学術大会発表論文を「地球人文学叢書」として出版する計画であり、Manfred B. Stegerの『Globalization: A Very Short Introduction』のような地球化入門書の翻訳作業を進めている。また、韓国学と地球学を主題として、英語論文と単行本の出版などを企画・推進している。

¹¹ たとえば、Roy Morrison 著、노상우訳『生態民主主義』、教育科学社、2005。구도완、『生態民主主義：すべての平和のための政治的想像力』、ハンディジェ、2018。

最後に、「地球人文学センター」は学際的研究を志向している点で、円光大学の多様な研究所とのネットワーク構築が可能で、円光大の建学理念と学問的方向を連結させ、円光大人文学の呼び水としての役割を担うことができると期待される。